



これ
は
オ
ル
ド
ン

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

キバナはどうしてる？

病院の近くに
部屋を借りて
そこで安静に
させています

彼のポケモンは
全てセンターへ
任せました

ああ、それなら
しばらくはそれで
様子を見よう
人は付けたのか？

いえ……本人が
嫌がったので…

そうか

頭の怪我は
それほどでも
ないのですが

やはり精神状態と
記憶の退行が
継続していますよ

あの孤島の時と同じ
状態に戻ったままか…

はい

キバナと仲のいい
人間にも言わない
ほうが良いと思います

今の彼は…他人を
平気で傷付けてしまう

そうだな
みんなにはただの怪我で
療養していると伝えよう



大丈夫なん
ですか?!

えええっ!
キバナさんが
ケガですか?!



少し打っただけ
なんですけど:
しばらく安静が
必要で面会も
できないですよ

会えないんですか?!
心配ですよそれ~!



大丈夫ですよ

キバナさん
大丈夫かな...

それに:
あのネズさんの顔...

ネズさん?

きっと...
すぐ戻ってきます



あ!

誰かの家に
行くのかな?

あれ...?
ネズさん...?



よかった
元気そう...!



キバナさんだ!



ちよっぴり
お見舞いする
くらいなら
いいよね♪

翌日



どうして病院じゃ
なんだろ...変なの...

キバナさん
あんなところに
いるんだ...



あつ
キバナさんっ
来ちゃいましたー





自覚はない…が
記憶喪失か…

ネズの言ってた事は
本当みたいだな…

ユ…ユウリです

誰だっつってんの

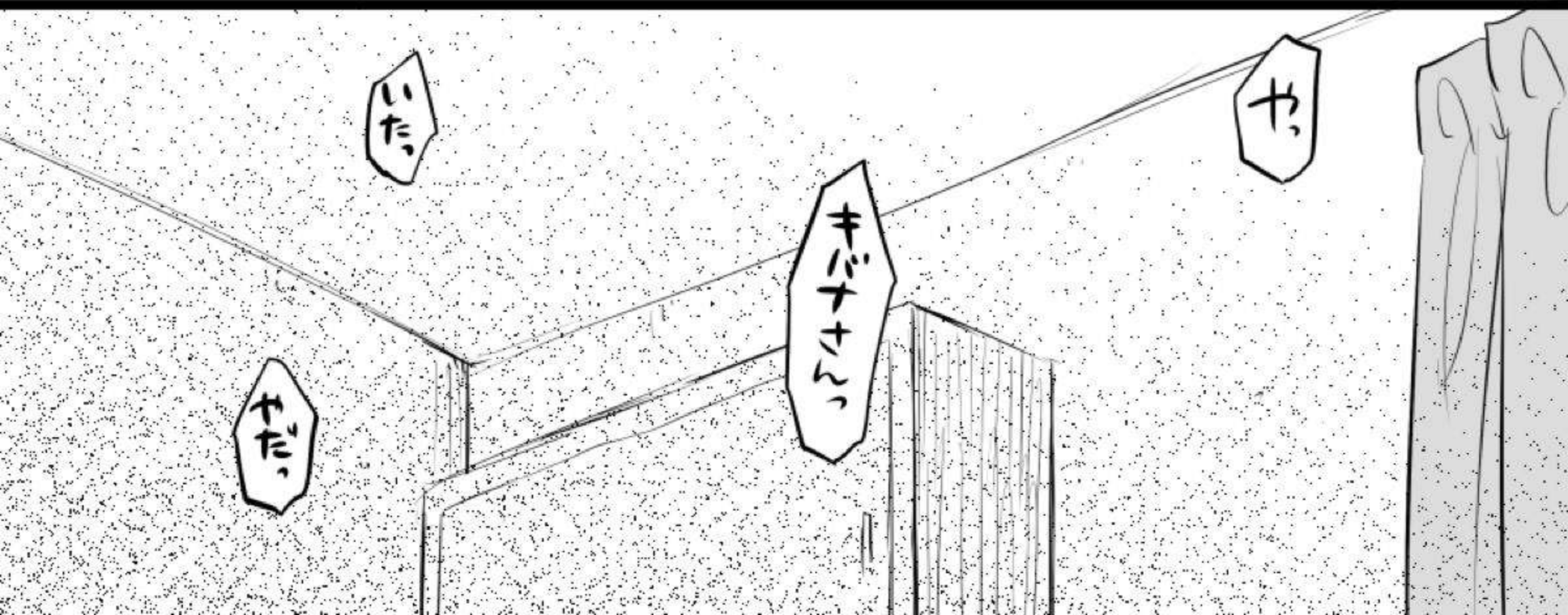
あの…私
キバナさんの怪我が
心配でお見舞いに…



遊んでけって

あの…私っ
帰りますっ

まあいいや
せっかくだし
遊んでいけよ



いた

キバナさん

や

やだ

また抵抗したら
噛むからな

返事は？

ヤダヤダ
言ってるくせに
気持ち良さそうな
声出してんじゃん

なー
オレとどういう
関係の奴なんだ？
もうセックス済み
なんだろう？

こんな可愛いのに
手エ出さないわけ
ないだろー？

知らないですっ
なにそれっ

キバナさんっ
なにこれっ

ほらっちも

ははっ

ムネちっさ

ははっ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ

ムネちっさ



じゃああ付き合ってもない男にいじりまわされて感じてるヘンタイか

違うないだろーこっちもぬるぬるで気持ち良くなってるのバレバレだからな？

やっぱお前がエロいだけだって

だって…キバナさんだから…

嫌なのに…嫌じゃなくなっちゃうんです…

これでまだやってないなんてウソだろ…

あー…ヤバ…

オレだからいいのか？

だれでもいいんだろ？

誰でもじや
ないですっ

キバナさん...だからっ

あ...

でも...

うっあ...

くちゅくちゅ

あ...

くちゅくちゅ

キバナさんっ
なんでこんなこと
するんですか...っ

どうしちゃったんですかっ

やなこととか
あったんですか？

タバコだって...

噛んだりとか...っ
こわいこと言ったり
やったりなんて絶対
しないじゃないですか

何か理由が...

何言ってるんだ？

あ...

あ...

もしお前の言ってるのが
本当だったとして
そのオレは毎日どれだけ
ガマンしてるんだよ

やりたいのに
やってないとか

それたぶん
オレじゃないわ

こわいよ...
やだっやだ...っ

やだあ

ギン

くちゅくちゅ

え...
痛...

くちゅくちゅ

くちゅくちゅ

くちゅくちゅ



こっちの口は「大好きー」
って素直だけどなー

あうっ

なあ...オレ様のこと
好きって言うってみ?

マジで初めてか

全部は
入らねーか
キツいな

さすがに...っ

やだっ

そんな...

おなか...なか...

これっ
つらい...

やっ

キバナさん...っ
ぬいて...っ
ぬいてえ...っ

やだあつ

キバナさん

きゅん

きゅん

きゅん



名前なんだっけ?

うまっ

ユウリ...

ユウリ
ほら言えって

私の名前呼ぶ感じが
いつもと全然違う...
記憶喪失って言うってたし

でも...顔も声も匂いも...
全部キバナさんだから...っ

あっ

あっ...キバナさんっ
キバナさん...っ

あ

きゅん

キバナさん

きゅん

カリ

カリ

い…言わない…です

あー？

ちゃんと言えない
悪い子は…

お仕置きする
しかねーな！

あ…あ…あ

あ…あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

お仕置きなのに
気持ちよくなってるの？
もっと激しくしないと
だめなのか？

あ…あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

あ…あ



よっ

くっ
いい!

こっちの方が
お前の気持ちよがってる
とこが見えるから良いな

くっ
くっ
くっ

あー
あー
あー

くっ
くっ
くっ



ほら
口開けろ

ん

あ



あ...これ...
キスしてるんだ...
気持ちいいな...

は

ん

ほ



気持ち良すぎて
あたま変になりそう...
キバナさんのが...お腹の
奥のところに当たってる...っ

んっ

ん

ん

ん

ん

ん

ん

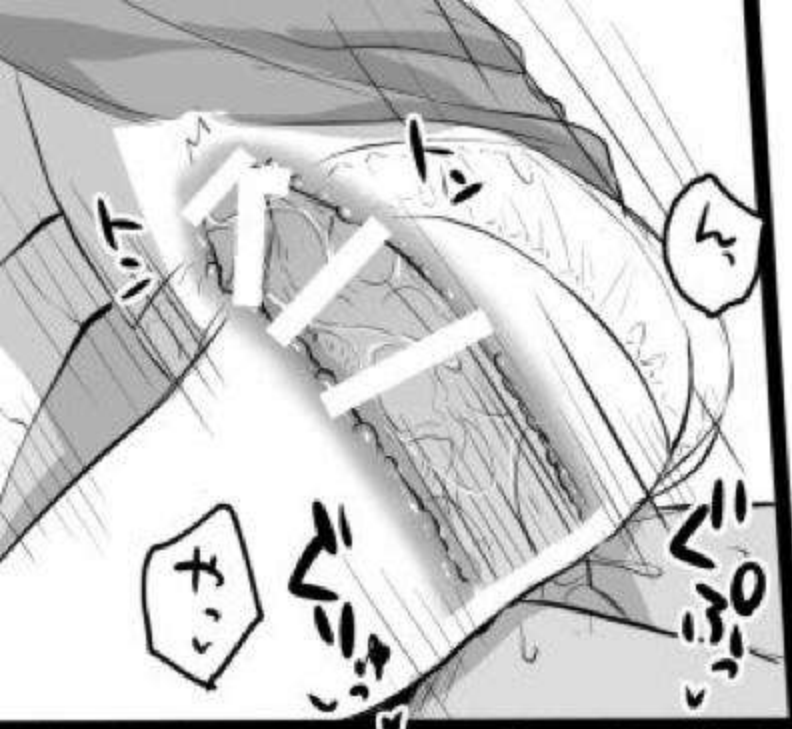
苦しいけど...
気持ちいいよ...

ぐっ
ぐっ

ぐっ
ぐっ

ぐっ
ぐっ

ぐっ
ぐっ



オレ様のこともちやんと
気持ちよくしてもらわないと

お前ばっかり気持ちよく
なってるのはズルいよな？

ははは
いったな
すげーギョウギョウ
締め付けてくる



ユウリのナカ
ギチギチですげー
きもちいいーなあ

腕ごっち…
つかまってろよ
ほらいくぞ

奥がいいんだ？
エロい声出てるぞ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

わー

はっ

はっ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ

きもちいいーなあ



このちっこい胸
オレ様が育てて
やるからなあ



は…ほんとかわいいな
いつでも気持ちよくして
やるからオレ様なしじゃ
いられない体になっていいぞ

キキキ

キキキ

キキキ



エロい顔やべーな
オレ様もイキそ...



まだまだ足んねーよ
大丈夫だって
お前のことももっと
気持ちよくしてやる

お前さん
お前さん



はー…
やりまくったなあ

お前のこと気に入ったわ
もーオレ様のだからな？
ずっとここいってもいいぞ

ん？なんか言ったか？

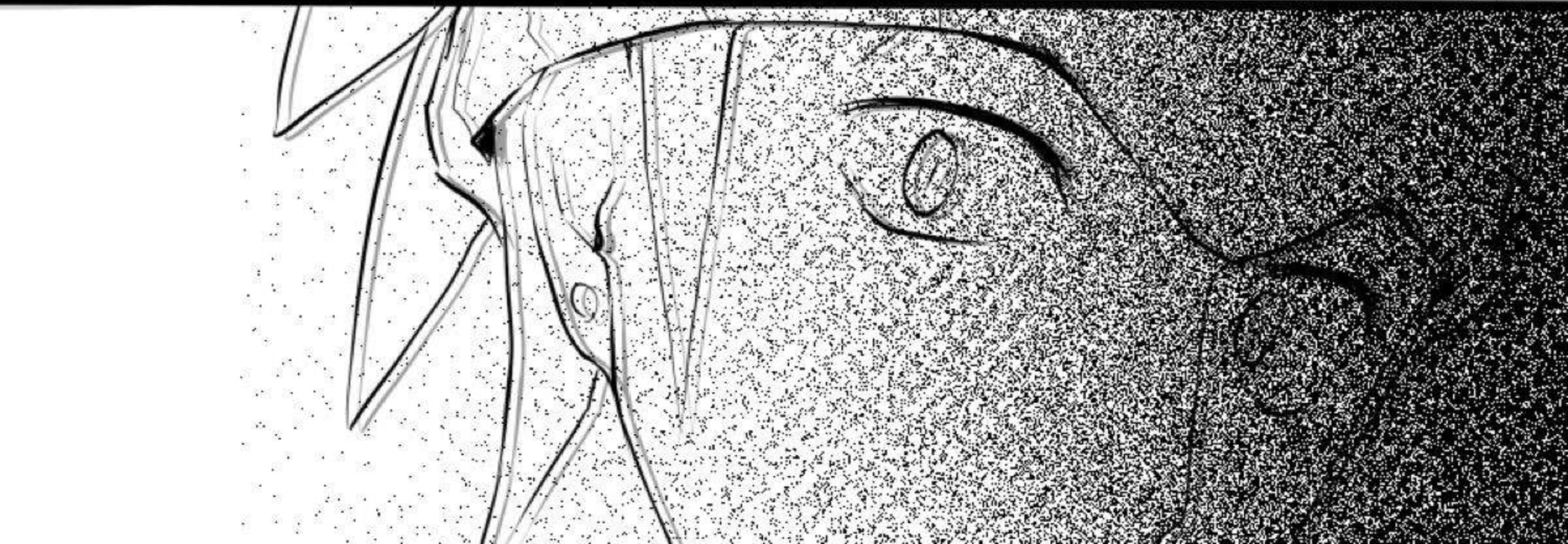


キバナさんのこと…
……すぎです…

キバナさん…

……

どんなキバナさんでも…
…でもいつものキバナさんが
一番…だいすぎだから…







このことは
他言無用です

ユウリは帰って
休んでください

とにかく…キバナはオレが
病院へ連れて行きますから

悪い想像

キバナさんあんなチャラくても
何気に真面目だったりするから
思い詰めて悪い想像なんて
しちゃったなら……

ウロ

あれから一週間経つのに
キバナさんジムにいないし

自分の意思じゃなく
あんなことしてたばいし
絶対あのこと気にして
悩んですはず……

ウロ

ホップもみんなも
キバナさんの居場所
知らないって言うし……

ネズさんは出ても
キバナさんのこと聞くと
すぐ切っちゃうし……

……出ないロト……

オツケーロトー！

ロトム!!
ネズさんにコールして！



よし…
それなら…



今日オフですよね？

もしもしダンデ？
ユウリに捕まりました
すぐ来てください



今度お礼になんか
食べ行こうねー

気にしないで
でも遊ぼうね

そうきましたか……

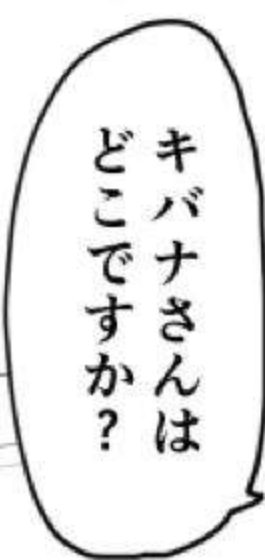
マリイが珍しく
誘ってくれたので
ウキウキで出てきた



……



とりあえず…キバナは
「ユウリに申し訳ないから
会うことができない」と
言っていました。
一体何があったんです？



キバナさんは
どこですか？




ダンデ全然来ないんで
話を始めますけど…



5年前にマグノリア博士に
頼まれて、未調査孤島へオレと
ダンデとキバナで行ったんです

まあ…だからダンデも一緒に
説明して欲しかったんですけど


その時…未確認ポケモンに
キバナが襲われました
そのポケモンの能力なのか
キバナの性格が一変して
己の欲望を全く抑えない
人格になってしまったことが
あったんですよ…



その時はオレとダンデで
なんとか戻せたんですが…

おそらく今回はバトル中の
事故で受けた衝撃のせいで
体内に残っていた因子が
キバナに影響を与えて
当時の記憶と状態に
戻ったと考えています

博士には今後の対策を探して
もらっているところです



キバナは昔からとても
他人やポケモンを思いやる
人間なんです…おそらく
普段から強く自分を制して
生きているんでしょう
それが無くなった状態…

つまりお前が見たもの
聞いたものは全部
アイツの本心でも
あるんですよ



そんなのキバナさん
絶対シヨック受けてる…
大丈夫かな……



でもあれ本心って…



いえ…なんかお前は
本当に大丈夫そうなんで
もう2人で話し合ったら
いいと思いますよ



…なんですか？



いやいや…
キバナさんが
大変なのに
そんな考え…



すまない！

道を間違えて
しまつて……っ

もう行きましたよ

クソポンコツ…

あれえ?!

ガチャッ

ゼエッ

だっ大丈夫なのか?!

オレも彼女を心配してたし
合わせない方が2人のため
かと思ってましたけど
ユウリは自分が傷付けられた
ことよりもキバナのことが
大事で大切みたいですし

あの様子なら…
少なくとも悪い方には
いかないと思いますよ

ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド

キバナさん!!
ここにいたんですね?!

ユウリ?!

ガ
ガ
ガ

ほろろ
いた…!!

なんで…

ネズか…っ
あの野郎…っ!!

ガ
ガ
ガ

本当に悪かった
お前にあんなことする
つもりなかったのにつ

ユウリ…また改めて
謝らせてもらうから…
今は帰ってくれ…!!

…頼む…っ

開けてください

キバナさん

ホント無理だって…

傷付けたくなかった相手を
傷付けておいて…
合わせる顔がないんだ
お前だってもう嫌だろう

キバナさん私のこと
どれだけ弱いと
思ってるんですか

確かに怖かった
ですけど

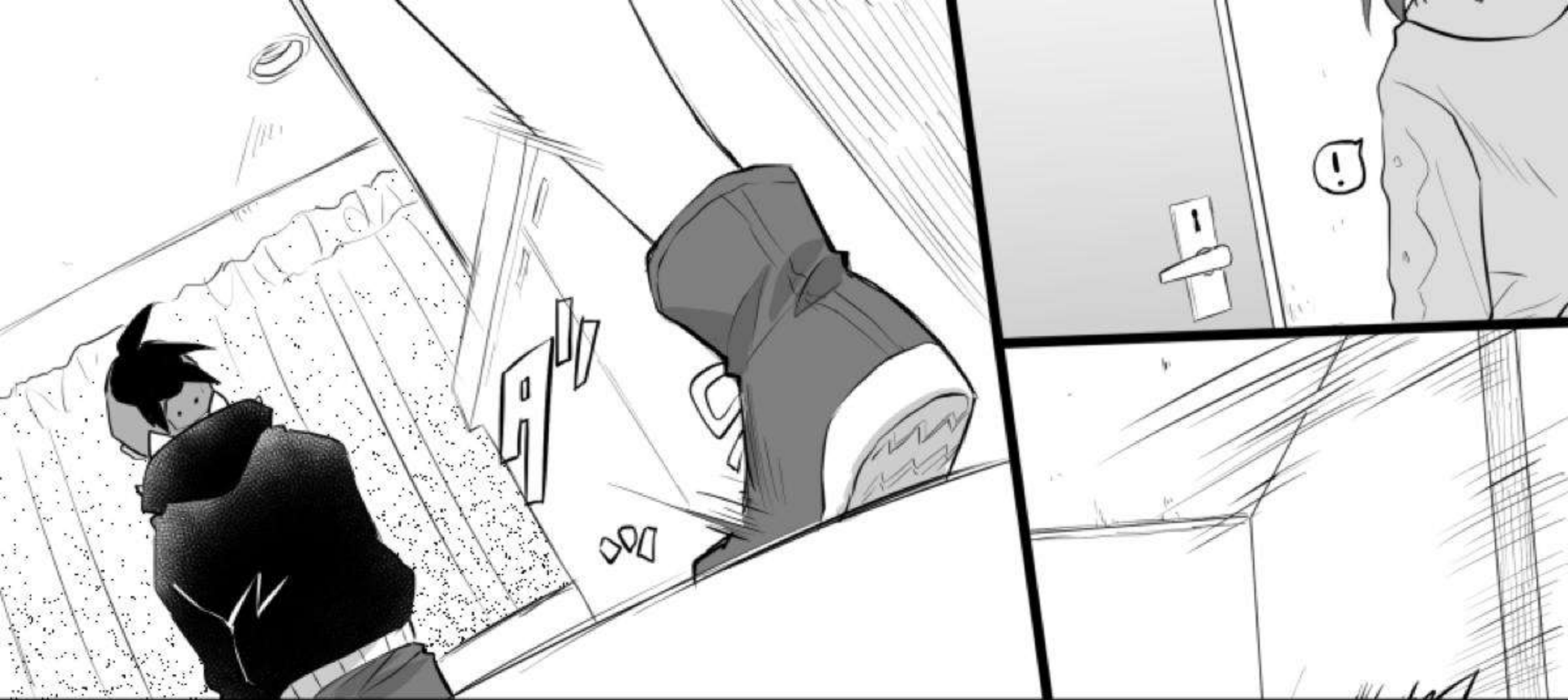
原因はさっき
ネズさんに聞いたので
キバナさんは悪くないのも

私にしたことで
キバナさんがすごく
傷付いているのも
わかってるんです

あんまり私のこと
見くびらないで
もらえますか？

開けないと
ゴリランダーに
このドアを
ブチ破らせます

びく、







なんかすみません
めっちゃめっちゃな感じに
なっちゃって……

いやー……オレも
情けないところを
見せて悪かったな……



とりあえず原因の
目星ついてるんです

もしまた同じこと
なってもいいように

何か対策したり
原因を取り除いたり
できるはずですよ

ああ



たださ……もしまた
あんなった時に
自分の嫌な部分が
出てくるってのが
やっぱ怖いな……

あれは……あれも
オレの中にあるもの
なんだよ……

ユウリは嫌だと思っただろうけど



え？そんなの

もちろん
わかってますよ？



あれもキバナさんです

他の誰かでもないし
操られてたとかでもない

キバナさんの中の
一つの要素だからこそ

ああいうことがあっても
私はもう全然大丈夫なんです



ああでも

キバナさんとの
そういう記憶が
あれだけだから

もう少し普通の
状況の記憶も
欲しいですよー

あれしか思い出せないのも
つらいんですよー

んんん

.....



.....
今？

今以外ありますか？

.....
ないな

ですよー

.....
シャワー
浴びてくるわ

あ...じゃあ
次私で.....



W
W



なあ…

もしオレがまた
あんなったら…
お前はどうする？

え？

そんなの決まってる
じゃないですか



私のポケモンで

ひりーん★

ブツ飛ばしてあげますよ！

フフツ

任せたぜ！

おしまい。

「あのさ、前からやってみたくいことがあったんだが」

うちにユウリが遊びにやってくると、オレはいつも少し変わった遊びを提案したくなってしまふ。許してくれるのか、困るのか。どっちに転んでもオレはユウリの反応を見るのが楽しいのだ。

「ユウリ、かくれんぼしようか」

突然の提案。そして、あまりにも子どもっぽいな提案だった。

「かくれんぼですか？」

大きな目を見開いてユウリが訊き直す。

「そう、まずオレさまが目隠しするじゃん？そんでユウリがこの家のどっかに隠れるわけ」
首をかしげるユウリに、もうひと押し。

「フフ、一回やってみたかったんだよ、恋人とな？」

「!!…いいですよ。そんなのやるの久しぶり！楽しそうですね」

「よっしゃ」

あからさまに嬉しそうなユウリが可愛い。今回はこういう反応か。

オレはヘアバンドをずり下げて、自分の目元がすっかり隠れるようにした…かったのだが、素材がニットなので結構透ける。そこで、ネクタイを取り出してきて、何も見えないようにきつく自分の頭を縛った。

「じゃあ、この玄関からスタートな」

「オレはリビングのはしっこにいるから。そしたら音とかでバレないだろ」

「はい！うふふ」

ユウリが履いたスリッパのぼたぼたした音が聞こえる。短い廊下を歩いているのだろう。

「あ、そっか。この音もバレちゃうよね」

…しばらくすると、何も聞こえなくなり、随分静かになった。

「もういいかい？」

「もーいいですよ！」

「お、じゃあ探すか」

手探りでリビングのテーブルに触れる。それから壁。自分の家とはいえ、壁に手をつたいながら、普段よりも慎重に歩を進める。

まずはバスルーム。湯船とシャワー付近を確認。

そしてクローゼット。かかっている洋服を押し分けて、手探りでユウリを探す。

「隠れた場所からは動かない決まりなんだけどな？ずいぶん上手く隠れたなあユウリ」

…実はオレは探すふりをしている。ユウリは今、玄関に立っている。ただでさえ感覚が鋭敏になっている今、人が一人そこにいるのなんてすぐにわかった。おそろく、意外性を狙うために、あえてどこにも隠れずに、玄関に立ち尽くしているのだろう。可愛い奴め。すぐ捕まえるには惜しかったので付き合ってはみたものの…。

クローゼットのある部屋からゆっくり歩を進める。

「いないなあ、どこにいるんだろうな」

空つとぼけたセリフ。ドアを出てすぐ左には玄関。ゆっくりだった動きを、ほとんど走るような速度に変える。

「えっ…!?」

思わずユウリは声を出してしまったようだ。腕を掴み、身体を強引に引き寄せる。

「みいつけた」

「ええっ!?分かってたんで…んむ」

やっと捕まえた。キスを落とす。浅いキス。浅いキス。我慢できずに深いキス。

「ん…ふ、ば、…ん」

ユウリはまだキスのときに普通に呼吸をするのが苦手だ。それが分かっているのに、わざと壁に押しつけて、息ができないくらいにする。

「はあ、可愛いなあ、ほんつとに可愛いなあ、オマエは」

「はあ、はっ…、気づいてたんですね、ここに立ってたの」

「初めっからな」

「もう！騙せると思ったのに」

ユウリの頬に触れる。深いキスのせいか、少し熱を持っている。

「…ん…あれ、キバナさん、目隠し外さないんですか？」

「なんか目隠しして歩いてたらちよつとくらくらするわ、すぐ外すと眩しいからさ、このままベッドまで連れて行ってくれよ」

「えっ…大丈夫ですか？」

ユウリは素直にオレの手を引く。

ベッドルーム。まあ、この遊びを提案した時点で、どうにかこうにかこういう展開にしてやろうと思っていたのだが。ぼん。肩を軽く押して、ユウリをベッドに乗せる。

「キバナさ…？」

「オマエさー、ほんと騙されやすいのな。」

「…あの、具合は…」

全て言い切らないうちに唇を塞ぐ。目隠しは外さない。ユウリの姿を目に焼き付けたい気持ちには勿論あったが、目隠しをしたことで感じられるユウリの全てに興味があった。

ユウリの唇の柔らかさ、舌の熱さ。唾液の甘さ。いつもよりも強く感じる。

「ん、んう、ふあ…」

「きはなさ、目隠しはずしてください…かわい…」

「んー？まだだめだな」

オレの頭をどうにか触って目隠しを外そうとするユウリの動きを制しながら、鼻をユウリの身体に押しつけて、匂いを吸い込む。胸元や首筋のあたりは、なんだか妙に甘い匂いがする。香水の匂いではないだろうと思う。脇。少しすっぱい匂い。

「や、やだ！はずかしいです！」

左手でユウリの両手を押さえつけている上、目隠しをしているので、ユウリの服のボタンを外すのに手間取る。確実に。ゆっくり。ボタンがぶちん、と音を立てるたびにユウリの身体が強張るのがわかった。粟立った肌にひたりと手のひらを乗せる。すでに熱をもっている。ゆっくり、ゆっくりと腹や胸の周辺をなぞる。

「ん、ん…っ」

「ユウリの肌はほんとうにやわいよな」

不意に速度をあげて、腹にかぶりつく。

「!?っ…ひあ」

そのまま腹を舐めあげる。できるだけ舌の力を抜いて、そうっと。掴んだユウリの腕にはぶつぶつと鳥肌が立っていく。こいつ、こんなことでも感じるのか。えっつろ。

腹を舐め上げたそのまま、歯でスポブラを押し上げて、まだまだ発達途上の胸元に顔をうずめた。やわい。軽く頬擦りをする。固くなった乳首が頬をかすった。

「ん、まだなんにもしてないのになあ。なんで乳首硬くしてんだよ、変態。」

「う、…」

胸を全て口に含む勢いでかぶりつく。舌で乳首を転がすと、ユウリは甘い声をあげた。

下半身にどつと血が集まるのを感じる。痛えわむしろ。あー、目隠し外してー。でもこれはこれでオレさまも感じるんだよなあ。ユウリの抵抗する腕の力が弱まる。

頭の上で押さえつけていた腕をぐいと下ろし、気を付けの姿勢にさせて抱きすくめた。結局どう頑張ろうが、ユウリの力ではオレには敵わない。

「は、あ、きはなさ…」

キス。キス。もうだめだ。唇よりも口内よりももっと奥。すべてが欲しい。

「ん、うっ…ふう」

結局ユウリは、オレの目隠しを外すことも忘れて、オレの胸元に手を当てているだけ。押し返すこともできず、されるがまま。

たっぷり口内を楽しんだ後、そのまま何度か頬にキスを落とす。耳を軽く噛んで囁く。

「キスと乳首いじっただけなのに随分反応いいんじゃないか？オレさまが目隠ししてるのが好きなんだろ」

「ちが、あ♡…違うんです…」

右手をユウリの腹にひたりと付けたまま、ゆっくり、ゆっくり滑り下ろしていく。薄い布地が中指にひっかかる。そのまま布地の中に指先をすすめる。可愛い。可愛すぎるだろ。びっしやびしやじゃねえか。今すぐつつこみてえな、これ。

「ふうん、こういうのに弱いのか、チャンピオン様は」

「あ…あ…」

視覚が奪われている分、ユウリの身体がどれほど柔らかくて小さいのか、いつもよりよくわかる。もちろん、身体が持っている熱も。

熱く煮え立ったそこに中指を差し入れようとすると、指先は一瞬拒まれる。しかしそれはほんの一瞬だけで、ほんの少し押し込めば…ずり。あーあ、こんなにしちまって。

柔らかい。泥のようだ。そのくせ、あちこちがでこぼこしている。ああ、オレがいつも気持ちいいの、ここだな。かき回すように撫でると、ユウリは悲鳴をあげた。

「ああ、ひああ…!!♡」

「…知ってる。ここがいいんだろっずーっとよしよししてやるよ」

オレの動きのひとつひとつにいちいち可愛い反応をするのが、この上なく愛おしい。そのくせ、泣かせたくなる。もういやだ、やめてください、キバナさん。そう言わせたい。指の動きを早くする。

「あ、あっ♡あ、あ、だめ、だめだめ、ああ…♡」

目隠しを外したい気持ちと、まだ外したくない気持ちの両方に駆られる。直接ユウリの痴態を見たい。この感覚をまだまだ楽しみたい。いや、見たい…。

「あ、ああ!?♡やだもう、いっちゃ…いっちゃやうう…」

泥のようだったユウリの内側が、硬さを帯び、締め付けが強くなる。奥の方には少し空間ができて、それが余計に指の速度を速めさせる。

「あああっ♡あっ、あ♡…イっ、…!!」

「ふは、かわいいなあ!?ユウリ」

指の動きはそのまま。ユウリの身体が激しく跳ね上がる。笑いが堪えきれない。

「もーイっちゃまったのな。」

いつもより随分早く達した。内側が激しく波打っているのを指先のすべてで感じ取る。いつもしている行為なのに、目隠しをするだけでここまで感じ方が違うのか。

息を荒くしているユウリが、なにやらごそごそと動き始める。おお？なんだなんだ？

「あ、はあ…キバナさ…」

手を伸ばし、オレの頭からネクタイをほどく。オレももう抵抗はしない。汗ばんで真っ赤な顔をした、やたらにいやらしい、オレさまの女がそこにいた。

「あの、キバナさ、したいです…でも」

ユウリは少し言い淀んだ。

「…キバナさんと見つめあって、したい、です……」

ははは。…だめだこりゃ。

「ひうっ!？」

ユウリの身体を抱え上げて、了承も得ずに、いきなりぶちこんだ。余裕がない。余裕がないと思う瞬間すら一瞬だった。

「はあっ…もう見ていいんだな？見つめ続けていいんだな？ん？」

「ああう…あ♡キバ、ナさんが、勝手にルール…つくっ…あ、♡」

ベッドの Springs が軋む音と、吐息と、嬌声。卑猥な水音。いつもならもう少しだけ優しくしてやって、オレのをゆっくり受け入れるように馴染ませてやるのに。

「ひっ♡ひ♡ひあ、ああっ!？」

「はあ…っ、は、痛いかな？…苦しいかな？…はっ…悪いな」

「ひ♡ちが、あ、ああ♡きも、ち…きもちい…」

そうか。オマエはこれでもオレを受け入れるのか。

「ど変態め。…く」

繰り返し繰り返し腰を打ち付ける。今までのオレさまは随分紳士的だっただろ？本当はいつもいつもオマエをこうしてやりたかった。全部だ。オマエの全部をぶちこわしてやりたいんだよ、オレは。

「あ、あ♡あ♡だめ、だめまた…また…あ♡」

顔も声も薄けきったユウリは、快楽に耐えきれず、目を閉じて耐えようとする。…話が違うだろ？ユウリの顎をひつつかんで、こちらを向かせる。

「おい、見つめ合いたいんだろ？」

その間も腰の動きは止めない。

「あ、あ…だって、だって、え♡」

「オレの目を見る。いいか？…はっ、目は閉じるな」

わざと突き放すような言い方をすると、ユウリは肩をふるりと震わせた。怖いのか？それとも今で感じたのか？オレの目だけ見てる。オレの欲望のすべてを見る。

「あ、あ、ん、あ♡きばなさ、きば、なさ…♡」

自分自身の昂りを抑えられない。

言うことを聞いてなるべく目を開いていようとするユウリに、容赦はしない。もうできない。全部オマエのせいだ。ユウリは何度も閉じそうになる目を瞬かせた。

「もうむりです、ごめんなさ…あ♡も、むりい♡いっっちゃ、またいっっちゃ…♡」

「はっ、はっ…いいよ、イけよ、イっちまえ…」

限界だ。

「ああう♡あっ、んああ、あっ、あああ♡」

「ん！…んく、…んん」

ほとんど同時に達したと思う。オレ自身がうごめくのと、ユウリの内側の激しいうねり。発散された欲望がすべてぶつかり合う。内側にどくどくと注がれるそれが、ユウリの内側と隙間なく溶け合っていく。

繋がったままお互いに肩で息をした。

「ユウリ、悪かった。怖い思いさせたな…？」

そっと頬に右手を沿わせると、ユウリは息も絶え絶えに微笑んだ。

「キバナさん、あのね」

「…ん？」

「好きです」

…オマエな。もう一発かますぞ、こら。

この度は「それもきみのひとつ」をお手に取っていただきどうもありがとうございます。
Twitterでの落書きが楽しすぎて、全然原稿が進まなかったり、途中で投げ出したくなったり
締め切り直前で原稿サイズ間違えて描いてることに気付いたり、いろいろありましたが
なんとか形にすることができました。

仕切り直しエチをした後に、あの後ユウリが病院へ行ってないと聞いて
慌てて連れて行くキバナさんとか、不慣れすぎて息子スティックの
扱いが乱暴でキバナさんを悶絶させちゃうユウリとか描きたかった
ですが時間がありませんでした。キバ主はページと時間が許せば
いくらでも描いていられる2人です。
おかげで、大変だけど楽しく作業してもらえました。

ゲスト原稿はかんたまさんとあみちゃんです。

かんたまさんは私がイベント参加するようにけしかけた
黒幕なのです。全部かんたまさんが悪い。
かっこいいキバナさんをどうもありがとうございます！
かんたまさんTwitter：@kantamuscle

あみちゃんも素敵エチエチSSを書いてくれました。
いつもTwitter良き妄想や絵をたくさん供給してくれています。
どうもありがとうございます！

この本で少しでも楽しんで頂けたら
嬉しいです。

20200206 巴もえ(ともえもえ)



WEB掲載版.



それもきみのひとつ

発行日:2020/02/23
これはWEB版です。

幻覚ファクトリー

印刷:ねこのしっぽ

巴もえ
e-mail
moemoe@peko.xii.jp

twitter
@___moe_moe___

pixiv
<http://www.pixiv.net/users/979537>

【禁止事項】
無断転載、複写、転用
webへのアップロード
ネットオークションや
フリマアプリなどへの出品

と
き
ひ
ま
の
も
も

おまけ本。

成人
向け



ん?
どうした?

ずっと
目を閉じてんな...

キミナナさんの
肌あったかーし

う...
なんかものすごく
恥ずかしいです...

んんん



んんん

んん

キバナさんっ
もうっ

くっつきたいですう...

んんん

んんん

んんん

んん

んんん

はー
ほんとかわいいな
ユウリは



んんんんんんんんんんん

んんん

んんん

んん

んんんんんんんんんんん



はあっ…

ユウリ
大丈夫か？

痛くね？

だいじょうぶです…

あゝ
うん



あゝ

っていうか…

なんか

あゝ

あゝ
あゝ
あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ



は、は、は、

は、は、は、

あ、キバナさん……っ



私もっ

は、は、は、

は、は、は、

は、は、は、



は、は、は、

あ、

だいすきですっ

あ、



ユウリ

は、

あ、

愛しているわ

は、は、は、

は、は、は、

なあ…ちよつと聞きたいんだけど

なんですか？

あのさ…あの時どーだった？

え?!

ああいう感じにされるのどんくらいイヤだった？

なっ

いや…無神経だな悪かった…思い出すのヤだろ

あのっ

えっ

あっ

は…恥ずかしいんですけど…

うん

今日みたいに優しくしてもらうのもすごく好きなんですけど…

この前みたいにですね…キバナさんの好きなようにしてもらおうのもですね…っ



WEB掲載用

それもきみのひとつ:おまけ本
20200223
幻覚ファクトリー:巴もえ
印刷:ねこのしっぽ

連絡先

メール:moemoe@peko.xii.jp

twitter: __moe_moe__

